

我慢する力をつけ、やり通す子を育てるために

つらいときを乗り越える 忍耐力を

上越教育大学准教授

お 男 定 本 橋

「つらいときを乗り越える力」について学級担任の視点で考える。視点の置き所は生活現実である。次に、その力を育てる方法を考える。

なぜ「つらいときを乗り越える」か

担任は普通「我慢の力」などをターゲットにして学級全体で継続的に指導するというやり方をとらない。それが複合的、総合的な力である上に、教室では個別的指導として取り組まれる場合が多いからである。だから、「つらいときを乗り越える」必要が生じた子どもに個別的に指導する、となりそうである。

視点を生活現実にごくと、そうは言っていられない。「つらいときを乗り越える」にかかわる指導が重要になる。学級全体で取り組み、継続的に積み重ねていきたい指導として浮かんでくる。

(1) 子どもの姿

子どもの学校・学級での生活をみると、目に付くのが「つらいとき」から逃げようとする傾向である。とりわけ、人間関係にかかわる煩わしきや対人関係上の「つらいとき」を避けようとする姿勢が目立つ。学級担任なら誰でも認めるくらい、大きく言えば日本の多くの教室に表れている傾向ではないか。

対立したり孤立することをおそれ、少しでもそうならないように、「つらいとき」がこないように、めいばい配慮、気遣いをする。それは、学校生活面での「つらいとき」に耐える力の劣化という側面をもつ。

(2) 学級担任の姿

実は、生活現実にかかわる教師の構えや学級経営力、指導力にも同じような傾向が表れている。学級担任

も、教育的働き掛けとして子どもにも「つらいとき」を与えることに躊躇していないだろうか。

学校・学級生活ではどうしても「つらいとき」は起こる。それを時には教育の土俵に上げ、子どもが自ら乗り越える機会として生かすのである。このような構えがあるかどうか。実際に「つらいとき」をくぐらせ、忍耐力などを高める体験にしていくこと。これだ。

生活現実を学びのフィールドにするとき、現実の「つらいとき」を選んだ平和指向オンリーでは生き方を学んだり、忍耐力を身に付けたりする上で不十分である。学級経営力、指導力の発揮が「つらいとき」抜きになっていないか。逃げていないか。

(3)学級の現状

生活現実に関して子どもも教師も

「つらいとき」を避けがちであることから、子どもたちは「つらいときを乗り越える力」を高める指導（大きな意味で「訓練」）を十分に受けることができずにいる。

子どもたちがもっているさまざまな対人的、内面的な傾向を踏まえ、学級の現状は次のようによみとることができるところ。ここでは主に小学校高学年、中学校を想定して考えていきたい。

○生活現実の事柄にかかわって、あるいは人間関係上の事柄にかかわって自分の思いを率直に外に出し合ったり、伝え合ったりすることができない。相手を傷つけるかもしれないし、自分が傷つくかもしれない。傷つけ合うような「つらいとき」を過ごさねばならないなら、黙っていたほうがよいということになる。

○相手の思いを知っても、自分と違う場合、どうしていいかわからない。ぶつかつたら「つらいとき」を過ごさねばならない。だからできるだけ対立しないようにする。

○かくして、学級の生活現実を「大したことはない、どうでもよい、やりたい者はやるが他の者は関係ない」という世界としてとらえる。互いに内面に踏み込まない、ちょうどよい距離と軽さのところを置き合う。

○過剰に気を遣い合い、見た目文句なしに学級に順応しようとするので、疲れるし、ストレスがたまる。

○一方で、共に何かに熱中したり、力を合わせて事を為し遂げたりして、人とのつながりや連帯感・一体感を味わいたい、仲間と共に感動したいという「本来の欲求」も

自覚している。実は、学級での「濃い」関係も期待している。しかし、それは「つらいとき」が起きやすい世界での話ということになる。だから期待だけで、なかなか自らは動こうとしない。

このような現状であることから、子どもが「つらいときを乗り越える」ための学びを進めることが重要になる。生活現実の中で生き方を学ぶことである。このことは、人間関係形成能力の形成や規範意識の醸成、社会性の育成。そしていじめ・不登校問題対応など、今日的な課題解決の取り組みに直結する。

担任は「つらいとき」を学びの土俵にするべく、前に一歩踏み出さねばならない。

「つらいとき」を乗り越える指導

ではどうするか。

攻めるのである。「つらいときを乗り越える」にかかわる指導を進めること。学級全体で取り組むこと。軸にするのは特別活動になる。目指すは三つ。これがメインである。

(1) 「つらいとき」に子どもを置く。

適切に、ちょうどよくである。具体的には、生活現実の諸問題を解決する自主的活動を進めていく。生活現実はずらず人間関係の現実を伴うので「つらいとき」をくぐらなければならぬ。

(2) 子どもが自ら「つらいとき」をくぐり乗り越えることに成功するよう、学びや体験を組み立てる。

成功するように、「つらいとき」を適切に、ちょうどよく仕組み、指導するのである。

特別活動の学級活動を使う。多くの場合、話し合い活動とそれに基

づく自主的活動から成る。その活動と成功体験を積み重ねていく。(3)以上の学級全体で子どもが主役となって取り組む中で、一人ひとりに「つらいときを乗り越える」方法を体得させていく。

学級集団自体にも、乗り越えられる仕組みややり方を「身に付け」たり、一人ひとりを支え励ます機能を高めたりする面がある。このメインとなる活動は「生活上の諸問題に取り組む活動」である。これをすぐに始めるといふのは、なかなか難しい。いまの子どものもつ傾向は相当に厳しい。子どもも「つらいとき」に遭わせ、くぐらせるのだから慎重な配慮ときめ細かな指導が求められる。教師すら避けがちなという実態があるのだから。まず、土台づくり、人間関係の基盤づくりが必要になる。それと諸問

題に取り組む活動をユニットにして進めていくのである。

乗り越える基盤づくり

重要なことは二つである。

過剰気遣いと順応でストレスいっぱいの子どもをしつかり受け止め支えることが第一である。すなわち、教師と子どもの信頼関係づくりである。教師に受け入れられているという実感、担任が認める学級の中の「居場所」があることは、あらゆる取り組みの基盤となる。

また、個別指導が基本であり、本稿の最初で述べた「つらいときを乗り越える」必要が偶然に生じてしまった子どもへの個別的指導と重なっている。

もう一つが、最近多くの学校が注目するようになったコミュニケーションスキルやソーシャルスキルトレ

ーニング、構成的グループエンカウンター、ロールプレイ、ピアサポートなどである。「ふわふわ言葉、ちくちく言葉」の指導も関心が高い。これらは総合的な学習の時間や学級活動内容(2)「適応、成長、保健安全」、時間を設定した取り立て指導で進められる。最初で述べた担任が学級全体で継続的に行うやり方にある。

後者を、なぜ人間関係形成や学級生活上にかかわる基盤づくりに位置づけるのか。

子どもがスキル訓練などで身に付けたものを、利害関係、力関係、好悪関係などのうごめく生活現実でいきなり発揮するのは難しいからである。スキルは日常の生活場面において「つらいとき」に発揮してこそほんものなのだが、シビアな生活現実への応用をすぐに求めるのは酷であ

る。発揮する場合は、まずは「ちょうどよい生活現実」、「ちょうどよい程度」の「つらいとき」がよい。諸問題に取り組む自主的活動で発揮させて強化する。活用の訓練にするのである。

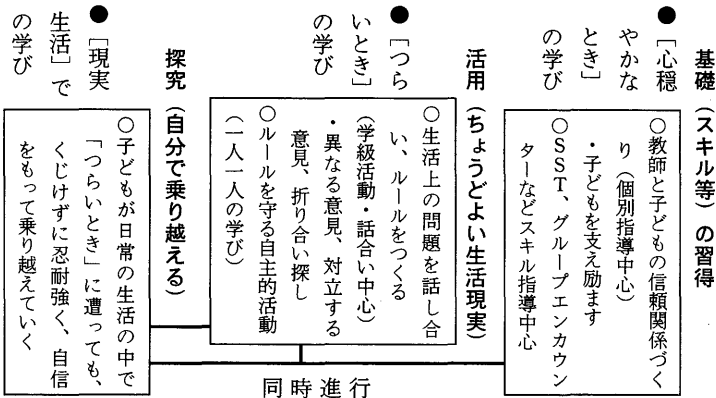
大切なことがある。要注意だ。

○「基盤づくり」と「諸問題に取り組む活動」は同時進行で進められるということ。基盤ができてから自主的活動を始める、ではないのである。

まだ人間関係が未熟だ、自己を開いて語り合うができない。「いつか」できるようになってから次に進む、となりやすいところがある。わかるのだが、その「いつか」はこない。まずこない。あくまで同時進行である。

乗り越える指導のユニット

以下にこの指導を図に示してみる。



メイン活動では学級生活上の問題を、教師が子どもに取り組ませるために適切に、ちようどよく「加工」することが大切になる。そして、話合いの土俵に上げる。

次のような「つらいとき」に子どもは追いつまれることになる。

○問題状況を吟味することが求められる。このとき、当事者、被害者、加害者、部外者等に分かれる。立場の異なるもの、利害の異なるもの、思いを出し合うことになる。だからこそ大切な訓練になる。

思っても支持がなければ通らない。だからこそ大切な訓練になる。

話合いで決議が出れば、そのルールなどに従わなければならなくなる。守りたくない子もいる。守る活動が始まれば、集団や個の有り様が問われることになる。現実には簡単に変わらない。動かない。だからこそ大切な訓練になるのである。

これほどの学びの機会が一人ひとりに、学級集団に訪れるのである。逃げたり、逃げさせたりはできない。

○解決策を出し合い、ルールを決めるなどの決議を求められる。考え、発想から違うものが並ぶ。根拠はその子の生き方を反映する。異なる意見、対立した意見を越えて「折り合いの付け所」を探さなければ多数決しかない。正しいと